

第49回

高齢者向け住宅の計画－食堂の計画－

近畿大学 建築学部
准教授 山口 健太郎



【経歴】

京都大学大学院を卒業後、株式会社メトス、国立保健医療科学院協力研究員を経て2008年より近畿大学理工学部建築学科講師。2011年4月より現職。

特別養護老人ホームや小規模多機能型居宅介護などの研究を行うかたわら、高齢者施設の設計にも関わる。主な建物に「ケアタウンたちばな、設計監修、大牟田市」などがある。

サービス付き高齢者向け住宅（以下、サ高住）では95%の住宅が食堂を設置している。特別養護老人ホームとは異なりサ高住に食堂の設置義務はないが、食事は生活に欠かせない行為であるため多数の施設が食堂を設けている。食事の提供方法については、厨房で作る形式が一般的であり、厨房で作った食事を各食堂に配膳する。食堂の配置計画は、おおむね下記の3つのパターンからなり、それぞれの住宅の特徴を踏まえて選定されている。

①ユニットケア型

特別養護老人ホームと同様に10戸程度の住戸で1つの食堂を共有する形式である。少人数でなじみの関係を築くことができ、空間スケールも住宅的なものになる。空間のスケール感については、特養とサ高住では住戸の基準面積が異なるため、その雰囲気も異なると考えられるが、実際にはほとんど変わらない。特養の旧基準である内法13.2㎡にトイレを設置した場合の目安寸法は3m×6m=18㎡となり、サ高住の住戸の緩和基準18㎡と同じとなる。内法と壁芯という表記の違いにより、差があるように見えているだけである。特養とサ高住では成り立ちが異なるが、実態として建てられているものはとてもよく似ている。

ケアの面においてユニットケアの効果が最大限に発揮されるのは、ハードとソフトが一致した時となる。ユニットケアでは職員とのなじみの関係が築きやすく、職員が食堂に滞在していることで臨機応変な対応が可能となる。職員がユニット内に常駐している事がユニットケアの中心的要素となる。サ高住については外部の介護サービスを利用するため、職員が食堂に常駐し10人の入居者に対して臨機応変な対応をとることは難しい。職員が固定配置されないことを

踏まえると、ユニットケア型の効果が少ないと言えるだろう。サ高住の中には各入居者の訪問介護を組み合わせ、実質的に職員を常駐させている施設もあるが、介護保険の使い方としては好ましくない。また、入居者の面からしても、見知らぬ者同士が10人という小規模な単位で生活するのは少し窮屈に感じるかもしれない。ユニットケア型については、将来的には特定施設の認可を受け介護付き有料老人ホームとして運営を行っていくことを前提とした上での経過措置として考えるのがよいと言える。

②グループリビング型

ユニットケア型が10名であるのに対して、もう少し入居者の人数を広げたのがグループリビング型となる。15人から20人程度のグループで食堂を共有する。グループリビング型を規模の大きなユニットケア型と捉えると同じ問題が発生してくるため、ここではケアの方法も変更していく必要がある。ユニットケア型では1人の職員が10人の入居者に対する食事の支援を行うが、グループリビング型では各入居者に1人ずつ介護職員が付く形式をとる。例えば、厨房からみそ汁とご飯が運ばれ食堂に設置されている。各入居者は訪問介護のサポートを受けながらご飯とみそ汁をよそい、メイン料理は訪問介護の職員につくってもらう。介護の支援が不要な人は、自分で主菜をつくり食堂で食べる。食事の時間も一定時間内であれば自由であり、各々が自分の時間に合わせて気の合った仲間と食事をする。サ高住側としてはビュッフェ形式のようにご飯とみそ汁、場合によってはメイン料理を用意するだけでよいため食事に要する職員が少なくてすむ。この場合、調理（自炊）の時間が重なる事があるため、キッチンも複数用意する必要がある。

ユニットケア型では心身機能が同一レベルの人が一緒に生活する事を前提として疑似家族的な関係や空間をつくり出してきたが、サ高住では自立から要介護まで様々なレベルの人が混在して生活していく。多様なレベルの人に対応していくためには、ユニットケア型よりもグループリビング型のように「個の自立」を前提とした関係性や住まいの方が適していると言える。また、ユニットケア型は職員の常駐を前提としてきたが、グループリビング型はあくまで介護職員は点での関わりを前提としている。常に誰かに頼る事ができるという安心感は少なくなるが、自立した個人という観点からすると一定の不安感を享受する心構えも必要ではないだろうか。

③大規模食堂型

食堂を分散させるのではなく1箇所のみまとめる方式が大規模食堂型となる。厨房で作られた食事をカウンター越しに受け取るカフェテリア形式が一般的と

.....

なる。もちろん歩行が不安定な人に対しては厨房職員が席まで配膳する。食事の衛生管理が行いやすく、調理や配膳に必要な職員を最小限に抑えることができるメリットがある。入居者としても、大学や会社の食堂のように自分の時間に合わせて食事をとれるため気楽である。課題としては食堂の規模が大きくなりすぎると、入居者間の関係性も疎遠となり入居者同士のコミュニケーションが発生しにくい点にある。入居者間のコミュニケーションについては、ユニット型のように規模が小さくなりすぎると全員に同一性が求められ、規模が大きくなるとその中に小集団が複数形成され、どこの集団にも属する事ができない人が出てくるという課題が生じる。グループの規模については、グループリビング型のようにつかず離れずの距離間を保てる規模が望ましいと言える。

また、大規模食堂型の食堂は一般のレストランとして地域に開放できる可能性がある。ファーストフードやコンビニなど食べることへの不便さを感じなくなった今日ではあるが、温かいごはんをゆっくりと食べられる場所は意外と少ない。サ高住の食堂が地域に開放されれば、高齢者だけに限らず学生や単身者、共働き家庭など多くの人が利用できる。サ高住の閉鎖性を緩和するためにも地域の食堂としてサ高住の食堂を位置づけることが重要である。

サ高住を施設という視点から見ると食堂が併設されていることに違和感はないが、集合住宅という視点から見ると食堂の併設は特別な事である。この食堂という機能をいかに活用できるかがサ高住の展開をにぎっているといっても過言ではないだろう。